

松本市教育研修センターだより

No.37 令和7年4月30日

教職員研修は何のために？

教育研修センター長 大久保和彦

以前、ある小学校の校長として勤務していた時のことです。校長室に小学校3年生の児童が訪ねてきました。その手には、取材用のメモ用紙があります。聞けば、初めての総合的な学習の時間で、「学校のことを色々な人に直接聞いて調べる」という活動に取り組んでいるとのこと。

「お願いします」の挨拶のあと、その児童が発した質問は、「先生は何のためにいるのですか？」というものでした。あまりにストレートな問いに一瞬戸惑い、私は少し考えた末、次のように答えました。

「…みんなが大人になったとき、幸せな人生を送るために必要な力を、学校生活の中で身につけてもらうために学校があり、授業や活動を通してその力を引き出していくのが先生の役割なんだよ…」

児童は一生懸命に私の言葉をメモしていましたが、後から少し長すぎたかなと反省し、ふと児童のメモをのぞいてみました。するとそこには、たった一言「先生は、わたしたちを幸せにするためにいる！」と、記されていました。その言葉に私は思わず胸を衝かれました。

そう、まさにその通り、私たち教員は、すべての子どもを幸せにするために存在しているのだというその使命を、子どもから示され、改めて強く心に刻むこととなりました。

ここで、新たな問いが立ち上がります。では、「子どもを幸せにするためにいる先生」のための研修は、いったい何のためにあるのでしょうか。

答えはやはり、「すべての子どもたちの幸せを実現するため」でしょう。さらに解像度を上げれば、「子どもたちの幸せを実現するための『教師や学校のあり方』を問い返す学びを通して、自分たち自身が変わっていく」ために、研修が必要なのだと思います。

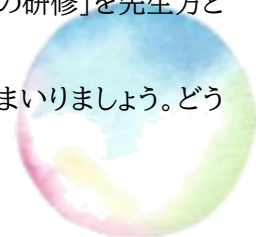
現在、教育界では子どもたちのウェルビーイングを実現するための力を育む新しい学びのあり方が模索されています。「主体的、対話的で深い学び」「探究的な学び」「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」などがその例です。しかし、これらの学びは、私たち自身が子どもだった頃には、ほとんど経験したことのない学びでもあります。

自分自身が体験したことがないことを、真に子どもたちに伝えるのは難しいものです。だからこそ、私たち教師が取り組む研修そのものが、「子どもたちに体験してほしい学び」と同じ質を持つべきだと考えています。

とはいえ、そのような理想的な研修のモデルがすでにあるわけではありません。先生方が自ら主体的・対話的に問いを立て、それを深め、新たな気づきを得て、子どもたちとともに実践しようという意欲につながる、そのようなこれからの「私たちの研修」を試行錯誤しながら創っていかなければなりません。

教育研修センターでは、このような「先生方自身が成長し、子どもの幸せを実現するための研修」を先生方とともに模索し、作り上げていきたいと心から願っています。

今年度も一緒に学びを深め、子どもたちの未来を幸せなものにするために力を尽くしてまいりましょう。どうぞ、よろしくお願いいたします。



新任転任教職員研修(4月10日 @あがたの森文化会館)

今年度松本市に着任した新任転任教職員に向け、曾根原教育長、山名教育監、大久保センター長の講話がありました。松本市が大切にしている教育・研修について、新たな仲間と共に意義を共有しました。

曾根原教育長からは、授業場面を想定した体験的なやり取りから、子どもたちとの学びの大切さが語られ、先生方に温かなメッセージが送られました。

教師という仕事は、時に困難もありますが、子どもたちの成長に立ち会い、感動で涙するような、何事にも代えがたい素晴らしい瞬間に満ちています。そして、皆さんの言葉一つひとつが、子どもたちの心に深く、そして長く影響を与えます。「あれ?」と感じた時こそ、「どうしたの?」と一呼吸おいて、子どもの声に丁寧に耳を傾け、その心に寄り添う姿勢を大切にしていきたいと思います。

現代の教育現場は多忙を極めますが、時には意識して「忘れる力」を持ち、リフレッシュすることも重要です。皆さんが心に余裕を持ち、子どもたちと豊かに関わられるよう、教材研究や同僚との対話の時間などを確保できるよう、私も環境整備に力を尽くします。

皆さんは、子どもたちが自分らしく、ありのままに輝ける学校を創り、日本の未来を形作る、誇り高い仕事に就かれています。どうかその誇りを胸に、全ての子どもたちに愛情を持って接してください。皆さんと共に、松本市の教育をより豊かにしていけることを、心から楽しみにしています。



達人に学ぶ！学級づくりワークショップ(4月22日 @勤労者福祉センター)

昨年に続き、岩瀬直樹先生（風越学園校長）による学級づくりワークショップが開かれました。この研修では、子どもたちが安心して関わり合えるクラスを作るための具体的なヒントが、学習者体験と実践者体験を往還しながら実感をもって学ぶ時間となりました。

岩瀬先生のワークショップでは、「体験を通して学ぶことの大切さ」が伝えられました。まず教師は、一人ひとりの子どもと繋がり「見ているよ」というメッセージを伝えることの重要性が語られました。その上で、クラス全体のコミュニケーションを活性化させる手立てがいくつか紹介されました。特に印象的だったのは、「短くたくさん話す」活動です。10秒程度の短い対話をペアやグループで繰り返すことで、コミュニケーションの量が増え、徐々に話しやすい雰囲気が生まれるとのことでした。また、いきなり難しいテーマを扱うのではなく、好きな食べ物などの簡単な話題から始め、関係性を築きながら徐々に深い学びに繋げることや、意見をホワイトボードに書き出して「思考を可視化」し、共有しやすくすることの有効性も教えていただきました。

これらの活動は、単なるアイスブレイクではなく、子どもたちが多様な他者と「そこそこうまくやれる」経験を積み、互いを尊重し合えるインクルーシブなコミュニティを築くための意図的なデザインであると岩瀬先生はおっしゃいます。日々の授業の中で、子どもたちが対話し、協働する経験を意図的にデザインしていくことの大切さを改めて考える機会となりました。



参加者の声

- 子どもの気持ちに寄り添って、スモールステップで人間関係をつくり、安心できる環境を作っていくたい。やってみようという気持ちを持てるように、モデルややり方など丁寧に示し、おもしろそう！やれそう！になるための準備をする。そのための時間確保（私たちの）が必要だと思っている。
- 子どもたちの教室での居心地の悪さを感じる、その居心地の悪さを解消していくステップを学ぶことができ、自己紹介をするにしても、ステップを踏むこと、コミュニケーションの順番を構成することの大切さを学ばせていただきました。
- 「よいコミュニケーションは自然発生しない」「関係性の再構築、つなぎなおし（リワイヤリング）は教師にしかできない」が心に残りました。